

再生された自伝的記憶の内容に抑うつ気分が与える影響¹⁾

— 非臨床群における検討 —

関 口 理久子²⁾ ・ 竹 中 健 二³⁾

The effect of depressive mood on the specificity of autobiographical memories in non-clinical individuals

Rikuko SEKIGUCHI and Kenji TAKENAKA

Abstract

This research investigated whether depressive subjects in non-clinical groups show an overgenerality of autobiographical memories, using the cued recall technique, and whether a distraction task affects the content of episodes they recalled in experimental groups, and whether there are negative biases in depressive subjects in episodes recalled by neutral cue words. Undergraduate students were screened by SDS and matched with the tendency of self-focusing, and divided into four groups (high-depressive and low-depressive controls, high-depressive and low-depressive experimental groups). The measures were the ratio of overgeneral memories, the level of specific autobiographical memories (0-3), the ratio of memories they recalled, their response latency, and the emotionality of memories they recalled in response to neutral cue words. The distraction task was an origami-task.

The results of this experiment were as follows: 1) The low-depressive control and high-depressive experimental groups recalled a significantly lower ratio of autobiographical memories, and a significantly higher ratio of overgeneral memories in response to negative cues than positive and neutral cue words. 2) But the high-depressive controls did not show any significant difference to low-depressive control in overgenerality of autobiographical memories. 3) There were no negative biases in depressive subjects. 4) The effect of distraction task was unclear. The result suggests that overgenerality is not state-dependant and is only found in people with a diagnosis of depression(Williams,1995).

Key words: autobiographical memory, overgeneral memory, cued recall technique, depression.

抄 録

本研究は、非臨床群を自己注目傾向の高低を考慮してSDSによりスクリーニングし、高うつ傾向統制群、低うつ傾向統制群、高うつ傾向実験群、低うつ傾向実験群の4群に分け、実験群では自己への注目を低減する気晴らし課題を用い、以下の3点を検討した。1) 高うつ傾向群間に、再生された自伝的記憶のエピソード性、反応潜時、エピソードの有無率、過度に一般化された記憶の割合、エピソード内容の情動性に違いがあるかどうかを、単語手がかり法を用いて検討する。2) 高うつ傾向群に再生されたエピソードのネガティブ・バイアスがあるかどうかを、単語の種類によるエピソードの有無率および中立語に対する自伝的エピソードの情動性について検討した。3) 気晴らし課題の効果があるかどうかを検討する。

実験の結果、以下のことが明らかになった。1) 低うつ傾向統制群は、肯定的情動語や中立語でエピソード性が高く過度に一般化された記憶の割合が低く、否定的情動語でエピソード性が低く過度に一般化された記憶の割合が高い傾向があった。高うつ傾向実験群は低うつ傾向統制群と同様の結果となった。しかし、高うつ傾向統制群でエピソード性が低く過度に一般化された記憶の割合が多いという結果は得られなかったことから、非臨床群の高うつ傾向の被験者では過度に一般化された記憶は示されなかったと考えられる。これは、Williams(1999)の過度に一般化された記憶を示すのは認知スタイルの特徴であり特性的なものであるという仮説を支持する。2) 低うつ傾向群においては気分一致効果が見られたが、高うつ傾向群におけるネガティブ・バイアスは見られなかった。3) 気晴らし課題の効果は明確ではなかった。4) 反応潜時に差はなかった。

キーワード：自伝的記憶、過度に一般化された記憶、単語手がかり法、抑うつ

1) 本研究は、平成15年度関西大学社会学部共同研究費において研究課題「現代人の認知様式に関する包括的研究」として研究費を受けたものの成果として公表するものである。

2) 関西大学社会学部

3) 関西大学大学院社会学研究科

記憶と気分の関係を検討した研究は多く行われているが、その中で最近注目されているのは、自伝的記憶と抑うつ気分の関係を検討した研究である。自伝的記憶 (autobiographical memory) とは、自分がいつどこでなにをしてどう感じたかなどの、特定の時期や場所で個人の過去に起こった出来事や事件についての想起である。感覚知覚的に詳細な特徴を備えているエピソード記憶が、時間の経過とともに自伝的記憶システムに統合され、その後は何年経っても想起できる自伝的記憶になる。自伝的記憶は、自分に起こった経験としていつでも想起することができる自分の経験の記憶であり、感覚知覚的に詳細な特徴を薄れさせており、個人的解釈やイメージの影響を受けやすいことが知られている (Conway, 2001)。自伝的記憶と気分の関係を検討した研究では、実験的に被験者に抑うつ気分を誘導した場合や被験者の特性としての抑うつ傾向あるいは抑うつ患者の被験者において気分一致効果について調べる研究 (Bower, 1981; 伊藤, 2000) と、うつ病と自伝的記憶の質についての研究 (Williams, 1999) が行われている。

気分一致効果の研究では、気分一致した感情価を持つ情報が符号化時に促進され、例えば、抑うつ気分である時には抑うつ的な情報の符号化が促進され、その他の情報の記憶は抑制され、その結果、再生に際して抑うつ的な情報がより想起されるという現象を気分一致効果と呼んでいる。抑うつ気分における気分一致効果は、抑うつ持続に重要な役割を果たすことが報告されている (Watkins, Vache, Verney, Mathews & Muller, 1996)。気分一致効果におけるネガティブ・バイアスは、自己に関連したネガティブな情報の処理 (筒井, 1997) や自伝的記憶の想起において生じやすいことが示されている (Christianson & Safer, 1999; 田上, 2002)。

うつ病患者が再生した自伝的記憶の質についての研究では、「幸せ」や「怒り」などの情動を表す手がかり単語 (affect word) を被験者に提示し、再生された自伝的記憶のエピソード性を評価する方法、すなわち、単語手がかり法 (またはCrovitz法) (Crovitz & Schiffman, 1974) が用いられている。この方法は、Robinson (1976) の方法を元に、Williams & Scott (1988) が行った研究によって、大うつ病 (major depressive disorder, MDD) の患者の記憶を検討する研究で用いられた。この方法を用いてMDDの患者の自伝的エピソードを調べると、健常な被験者に比べて、情動語については具体的な自伝的エピソードをほとんど再生しない傾向が示されている (Williams & Scott, 1988; Brittlebank, Scott, Williams & Ferrier, 1993)。MDDの患者が再生したエピソードは、健常な被験者に比べて、より概念的で個々のエピソードの持続時間が長いことから、Williams (1999) は、このような記憶を過度に一般化された記憶 (overgeneral memory)⁴⁾ と呼んでいる。過度

に一般化された記憶とは、自伝的エピソードの再生に際して、通常は時空間に定位された個人的なある特定のエピソードを再生する（例えば、「後悔」という単語で再生したエピソードが、「先週の日曜日にデートの待ち合わせの時間に30分遅れて待たせた」など）が、MDDの患者では、エピソードが過度に一般化または抽象化され、特定の時空間的情報が欠落したり、1日以上以上の繰り返しの出来事の想起になる（例えば、「後悔」という単語で再生したエピソードが、「母に嘘をついた時」など）特徴を持っている。また、このような過度に一般化された記憶は、MDDの患者の認知的特徴を評価する方法として用いられている（Williams, 2000; Nandrino, Pezard, Posté, Réveillère & Beaune, 2002）だけでなく、不安障害（Burke & Mathews, 1992; Wessel, Meeren, Peeters, Arntz & Merckelbach, 2001）、境界性人格障害（Arntz, Meeren & Wessel, 2002）、心的外傷後ストレス障害（Post-Traumatic Stress Disorder, PTSD）（McNally, Lasko, Macklin & Pitman, 1995）など様々な症状についても検討されている。Williams(1999) は、過度に一般化された記憶を示すのは、特性的抑うつ被験者の場合であり、不安や状態的抑うつではこのような傾向を示さないとしている。しかし、14の研究をメタ分析したVan Vreeswijk & De Wilde(2004) によると、過度に一般化された記憶を顕著に示すのはMDDの患者であるが、状態的抑うつ気分との関係がある可能性も示されている。

最近では、自己注目（self-focused attention）が、抑うつ気分の持続に重要な役割を果たしているという研究が多く行われている。自己注目とは、人が自分自身の内面にばかり注意を向けることである。Pyszczynski & Greenberg(1987) は、感情的に落ち込む出来事（negative event）を経験し抑うつ気分になった人は、自己のよくない側面に注意を向けさらに気分を落ち込ませるという事実に着目し、抑うつの自己注目スタイル理論を提唱した。また、坂本（1997）は、自己注目傾向の高い人は抑うつ傾向が高いことを明らかにしている。これらの研究を通して、自己に注意が向かわないようにすることや自己を意識しないようにすることが、抑うつ気分を改善させる上で重要な方策と考えられるようになってきた。

Nolen-Hoeksema (1991) は、抑うつ気分がどれくらい持続するかは、感情的に落ち込む出来事に対する反応スタイルの個人差によると考え、抑うつ的な人では、自分の抑うつ気分や症状に注意を向け、それについて考え続けることでさらに抑うつ気分を持続させるとしている。また、このような反応スタイルを持つ人に自己に注意を向かせない方法とし

4) Clark, D. M. & Fairburn, C. G. (Eds.) 伊藤雅臣監訳 認知行動療法の科学と実践 (2003, 星和書店, pp214-216) の訳に準拠したが、エピソード内容の特徴から「過度に概括的な記憶」という訳も適当であると思われる。

て、気晴らし法 (distraction) を用いて、抑うつ気分が改善することを示している (Nolen-Hoeksema & Morrow, 1993)。Watkins, Teasdale & Williams (2000) は、うつ病患者が再生した自伝的記憶について、気晴らし法と注意分散法 (decentring) の効果を検討し、気晴らし法や注意分散法によってうつ病患者の過度に一般的な記憶が減少したことを示している。気晴らし法は抑うつ的な自動思考を避ける点で有効であり、主な方法には外界の事物に注意を集中させる方法、カウンティングをさせる方法など、思考操作で自己以外のことを考えさせる方法が一般的だが、その他にも、何らかの活動に没頭することも有効であり、その活動にはクロスワードパズルやゲームのように知性と身体を同等に使うような活動を選択することが重要であるとしている (Fennel, 1989)。

以上のような先行研究を踏まえて、本研究では、以下の4点を研究の目的として検討する。第1に、非臨床群において、自己注目傾向の高低を考慮した上で抑うつ傾向の高い被験者と抑うつ傾向の低い被験者に分け、再生した自伝的記憶のエピソード性、エピソードがあるかないかの判断までの反応潜時、単語の種類によるエピソードの有無率、過度に一般化された記憶の割合に違いがあるかどうかを、単語手がかり法を用いて検討する。第2に、気晴らし課題を行わせ、自己に向かう注意を低減させる操作を加えた実験群と、操作を加えない統制群との間で、再生された自伝的記憶のエピソード性、エピソードがあるかないかの判断までの反応潜時、単語の種類によるエピソードの有無率、過度に一般化された記憶の割合に違いがあるかどうかを検討する。第3に、抑うつ気分によるネガティブ・バイアスがあるかどうかを単語の種類によるエピソードの有無率および中立語に対する自伝的エピソードの情動性 (エピソードの内容における否定的な気分の強さあるいは弱さ) について検討した。第4に、本研究では、簡単に施行でき活動に没頭させる課題という点で、折り紙課題を気晴らし課題として用いた。

先行研究と異なる点は、第1に、非臨床群における抑うつ傾向の違いが、自伝的記憶のエピソード性に影響を与えるかどうかを見ることを目的とし、臨床群で用いられる2分法のエピソード評価 (過度に概括的か特定の) に加えて評価基準をより詳細にした自伝的エピソードの詳しさの評定 (関口, 2002) を行った。第2に、抑うつ傾向の高低だけではなく、抑うつと相関が高いと言われる自己注目傾向の程度を統制したこと、第3に、自己に注意を向けさせない操作として気晴らし課題 (distraction) のみを単独に用いて、その効果を検討した。

仮説としては、第1に、もし、過度に一般化された記憶が非臨床群における抑うつ気分と関係があるならば、語の種類に関わらず抑うつ傾向の高い被験者が再生した自伝的記憶

のエピソード性は抑うつ傾向の低い被験者の自伝的記憶におけるよりも低く、過度に一般化された記憶の割合は高い傾向を示すと予測される。また、抑うつ傾向の高い被験者が気晴らし課題を行った後の再生では、そのような傾向が緩和されると予測される。第2に、抑うつ気分によるネガティブ・バイアスがあるならば、抑うつ傾向の高い被験者に否定的情動語を提示した場合と肯定的情動語を提示した場合のエピソード有無率を比較すると、エピソードが「ある」と答える割合は否定的情動語の方が高いと予測される。また、抑うつ傾向の高い被験者が気晴らし法を行った後の再生では、そのような偏り傾向が緩和されると予測される。第3に、抑うつ傾向の高い被験者が再生した自伝的エピソードの情動性（エピソードの内容における否定的な気分の強さあるいは弱さ）は、抑うつ傾向の低い被験者よりも、否定的な気分が強く表れると予測される。また、抑うつ傾向が高い被験者が気晴らし法を行った後では、そのような傾向は緩和されると予測される。

方 法

被験者 大学生31名（平均年齢20.25歳、男10名、女21名）で実験を行った。被験者のスクリーニングに際しては次のような手続きで行った。まず、大学生129名にZung(1965)の開発した自己記入式抑うつ性尺度（Self-rating depression scale, SDS）の日本語版（福田&小林, 1983）と自己没入尺度（坂本, 1997）を実施し、その得点を元にスクリーニングを行った。SDSの尺度得点の上位25%を抑うつ気分の高い群（以下高うつ群⁵⁾）、下位25%を抑うつ気分の低い群（以下低うつ群）とし、自己没入尺度の尺度得点の上位25%群、中間群、下位25%群の各群より高低うつ群に割り当て、4群間の自己没入尺度得点の平均

Table 1. 4群のSDSおよび自己没入尺度（Self-focusing）の平均点

群		SDS		self-focusing	
		mean	SD	mean	SD
抑うつ高	実験群(n=8)	50.75	2.25	32.63	7.73
	統制群(n=8)	50.38	3.38	32.13	6.53
抑うつ低	実験群(n=8)	33.43	3.78	30.14	7.06
	統制群(n=7)	34.63	4.17	33.50	6.55

5) 非臨床群において抑うつ気分の高い被験者は、うつ病患者と明確に区別して、抑うつ傾向をもつ群（dysphoric subjects）とする方がよい（Bradley et al., 1997; Kendall et al., 1987）が、本論文では表記の便宜上このようにした。

が同じになるように釣りあわせを行った (Table 1)。4 群のSDSの平均値について分散分析した結果、群の主効果が有意であり ($F(3,30)=58.87$, $p<.001$)、多重比較の結果、高うつ統制群と高うつ実験群は低うつ統制群と低うつ実験群に比べ有意にSDSの平均値が高く ($p<.01$)、高うつ実験群と高うつ統制群間、低うつ実験群と低うつ統制群間には有意な差が認められなかった。また、4 群の自己没入尺度得点の平均値について分散分析を行ったところ、有意な差は認められなかった ($F(3,30)=0.31$, n. s.)。以上から、抑うつ気分の高低では差があり、自己注目では等質である4 群に分けられたことが示された。

装置 パーソナルコンピュータ (Dell社製Dimension 8250)、MDレコーダー (Sony社製MZS-R 4 ST)、マイクロホン (aiwa社製ステレオコンデンサーマイクロホンCM-S32)。

手続き 気分評定として、特定の気分を表す4語 (元気な、はつらつとした、悩んでいる、沈んだ) について、10cmの線分上 (最小 (0%) が全く感じていない、最大 (100%) がはっきり感じている) で今の自分の気分を評定させる視覚的類推気分評定 (visual analogue mood scales, 以下VAMS) を用いた。気晴らし課題を行わない統制群 (以下Cont群) の被験者は、気分評定後、すぐに単語手がかり課題を行った。気晴らし課題を行う実験群の被験者は、まず気分評定を行い、気晴らし課題 (折り紙課題) 後に再び気分評定を行い、その後に、単語手がかり課題を行った。単語手がかり課題は、まずモニターに提示された単語についてエピソードの有無の判断を行い、その後思い浮かんだ自分のエピソードを、いつ、どこで、だれと、なにをしたかについて、できるだけ詳しく、練習語2個、本実験語15個の単語について話すという課題であった。反応潜時とエピソードの有無がパソコンで記録された。「あり」と回答した場合も「なし」と回答した場合も、叙述内容はMDレコーダーで記録された。本実験では、中立語 (以下N語) 5個、否定的な情動語 (以下情動的否定語) 5個、肯定的な情動語 (以下P語) 5個、計15個 (Table 2) をランダム提示した。被験者は、パソコンの画面に単語が提示されると、まずエピソードがあるかどうかを、マウスのクリックにより「あり」・「なし」で答える。「あり」の場合は、そのエピソードについて口頭で自由に話した。「なし」の場合は、次の単語を被験者自身が

Table 2. 実験に用いられた単語手がかり

肯定的情動語	否定的情動語	中立語
幸せ	怒り	走る
喜ぶ	傷つく	訪れる
楽しい	寂しい	本
安心	後悔	車
成功	失敗	流行

クリックにより次画面を提示し、同様の反応を行った。この際、単語提示から「あり」または「なし」の判断のマウス・クリックまでの反応潜時がミリ秒単位で記録された。

データ分析方法

VAMSによる気分評定について SDSの評定から本実験までの期間が約2週間あったため、抑うつ気分に対して適切なスクリーニングが行われたかを確認するために、4群の実験開始前におけるVAMSの4語の気分評定量において、「元気な」と「はつらつとした」を肯定的評定語、「悩んでいる」と「沈んだ」を否定的評定語とし、抑うつ気分高低（2）×気分評定語（2）の2要因の分散分析を行った。抑うつ気分高低は被験者間変数、気分評定語は被験者内変数であり、従属変数は、気分評定語の合計量（cm）であった。気分変化に対する気晴らし課題の効果については、抑うつ高低の実験群における課題前後の2回のVAMSの4語の気分評定量（cm）において、「元気な」と「はつらつとした」を肯定的評定語、「悩んでいる」と「沈んだ」を否定的評定語とし、高低（2）×課題前後（2）の2要因、抑うつ気分は被験者間変数、課題前後は被験者内変数の分散分析を行った。従属変数は、気分評定語の合計量（cm）であった。

反応潜時 エピソードへのアクセスのしやすさ（memory accessibility）について検討するために、単語提示からエピソード有無について判断するまでの反応潜時（ミリ秒）を従属変数として、またエピソードが「あり」と判断した場合の反応潜時（ミリ秒）を従属変数として、抑うつ気分高低（2）×気晴らし課題有無（2）×単語の種類（3）の3要因の分散分析を行った。抑うつ気分の高低と気晴らし操作の有無は、被験者間変数であり、単語の種類は被験者内変数であった。「なし」と答えた場合の反応潜時については、単語の種類や被験者によっては「なし」と答える場合が全くない場合が多く、分析の対象にはしなかった。

再生されたエピソード性 各被験者の各単語の叙述内容465個について、評定基準（Table 3）に基づいて、実験者以外の評定者2名による0～3点のエピソード性評価を行った（ $\kappa = .65$, $p < .0001$ ）。この評定値を従属変数として、抑うつ気分高低（2）×気晴らし課題有無（2）×単語の種類（3）の3要因の分散分析を行った。抑うつ気分の高低と気晴らし操作の有無は、被験者間変数であり、単語の種類は被験者内変数であった。また、先行研究との比較をするために、評定値をもとに過度に一般化された記憶指数を計算した。2人の評定値の平均のうち、2点以上を特定の記憶（specific memory、以下Spと略す）、2点より小さい場合を過度に一般化された記憶（overgeneral memory、以下Ogと略す）として分類し、各被験者の各単語ごとに、過度に一般化された記憶指数＝Ogの

Table 3. エピソード評価基準

評価点	基準	例
3点	時間や場所が特定できるエピソード記憶（例 A） 「～という場所で、～の時に、～のようなことがあった」、「その時、誰々が一緒にいた」、「私が（誰々が）～と言った」などが再生できる。	【例 A】 この間の日曜日、10 月 26 日に、友達と京都に遊びに行った。友達の名前は、山田太郎です。鴨川の川縁の遊歩道を歩いている時、犬の散歩をしているお婆さんが、ボールを川の中に投げると、その犬が川の中にドンドン入って行って、ボールをくわえてとってきた。それを見て、友達と笑った。時刻は、夕方 4 時半頃でした。20 分くらい見ていました。
2点	個人的だが特定ではない出来事（例 B）、または、特定の出来事だが時間や場所が特定不能（例 C）	【例 B】 大学生の時から院生までバイトで家庭教師をしていた。そのバイト先に週 2 回行っていた。5 人姉妹の次女を教えていたら、次に三女を教えてほしいと言われたので、その子も教えた。四女の子も少しだけ教えた。結構長いことやっていた。 【例 C】 冬に雪が降ったとき、道路にうすすら雪が積もっていて、車に乗っていてブレーキを踏んだら、1 回転して止まった。とても怖かった。いつごろか憶えていない。
1点	曖昧な個人的記憶、特定の出来事に言及しない（例 D）	【例 D】 昔、ものすごくきれいな夕日を見たことがある。
0点	無反応（例 E）、または、意味記憶に基づいた反応（例 F）	【例 E】 なにも思いつきません。 【例 F】 「歌う」と言えば、カラオケとか。

頻度／（Spの頻度＋Ogの頻度）を計算した。この値を逆正弦変換した値を従属変数として、抑うつ気分高低（2）×気晴らし課題有無（2）×単語の種類（3）の3要因の分散分析を行った。

エピソードの有無率 各被験者の各単語提示の際のエピソード有無の判断の比率を計算し、それを逆正弦変換した値を従属変数として、抑うつ気分高低（2）×気晴らし課題有無（2）×単語の種類（3）の3要因の分散分析を行った。抑うつ気分の高低と気晴らし操作の有無は、被験者間変数であり、単語の種類は被験者内変数であった。

情動性評定 各被験者のN語に対するエピソードの叙述内容について、実験者以外の評定者2名による情動性評価（－1：否定的、0：どちらでもない、＋1：肯定的）を行った（ $\kappa = .75$, $p < .0001$ ）。この評定値を従属変数とし、抑うつ気分高低（2）×気晴らし課題（2）の2要因の分散分析を行った。

結 果

VAMSによる気分評定について 分散分析の結果、抑うつ傾向と気分評定語の主効果は有意ではなかった（それぞれ $F(1, 29) = 0.03$, $F(1, 29) = 0.41$, いずれも n. s.）が、抑うつ

傾向×気分評定語の交互作用に有意な差が認められた ($F(1, 29) = 7.09, p < .01$)。単純主効果の検定の結果、否定的気分評定語における群の効果 ($F(1, 58) = 4.38, p < .05$) と低うつ群における語の効果 ($F(1, 29) = 5.45, p < .03$) が有意であり、肯定的気分評定語における群の効果に有意傾向が認められた ($F(1, 58) = 3.50, p < .07$)。否定的気分評定語では低うつ群の評定が有意に低く、肯定的気分評定語では高うつ群の評定が低い傾向が認められた。実験開始直前の気分でも、低うつ群では有意に否定的気分 < 肯定的気分、高うつ群では否定的気分 > 肯定的気分の有意傾向が示され、両群の気分が異なっていることが示された (Figure 1 - A)。気晴らし課題の効果については、分散分析の結果、否定的情動語の評定量では、抑うつ傾向の主効果が有意であった ($F(1, 13) = 5.31, p < .04$) が、前後の主効果と群×前後の交互作用は有意ではなかった (それぞれ $F(1, 13) = 0.68, F(1, 13) = 0.23$, いずれも n. s.)。否定的情動語では、高うつ群は低うつ群に比べて有意に評定値が高かった。肯定的語の評定量では、群の主効果に有意な傾向が認められた ($F(1, 13) = 3.43, p < .09$) が、前後、抑うつ傾向×前後の交互作用には有意な差は認められなかった (それぞれ $F(1, 13) = 2.62, F(1, 13) = 1.59$, いずれも n. s.) (Figure 1 - B)。

反応潜時 分散分析の結果、抑うつ傾向、課題、語の種類の主効果および抑うつ気分×課題、抑うつ傾向×語の種類、課題×語の種類の1次の交互作用、抑うつ傾向×課題×語の種類の2次の交互作用のすべてにおいて有意差は見られなかった (それぞれ $F(1, 27) = 1.38, F(1, 27) = 0.42, F(2, 54) = 1.77, F(1, 27) = 0.55, F(2, 54) = 0.24, F(2, 54) = 0.14, F(2, 54) = 0.57$, いずれも n. s.)。エピソードの有無までの判断の反応潜時には差がないことが示された。また、同様に「あり」と答えるまでの反応潜時についても、抑うつ傾向、課題、語の種類的主効果および抑うつ傾向×課題、抑うつ傾向×語の種類、課題×語の種類の1次の交互作用、抑うつ傾向×課題×語の種類の2次の交互作用のすべてにおいて有意差は認められず (それぞれ $F(1, 27) = 1.97, F(1, 27) = 0.89, F(2, 54) = 0.53, F(1, 27) = 1.10, F(2, 54) = 1.17, F(2, 54) = 0.25, F(2, 54) = 0.19$, いずれも n. s.)、「あり」の判断の反応潜時にも差がないことが示された。

エピソード性 エピソード性評価点の分散分析の結果、単語の種類の主効果と抑うつ傾向×気晴らし課題有無×単語の種類の2次の交互作用が有意であった (それぞれ $F(2, 54) = 8.48, p < .001, F(2, 54) = 5.31, p < .01$)。抑うつ傾向の主効果と課題の主効果は有意ではなく (それぞれ $F(1, 27) = 0.10, F(1, 27) = 0.08$, いずれも n. s.)、抑うつ傾向×課題、抑うつ傾向×単語、課題×単語の1次の交互作用は有意ではなかった (それぞれ $F(1, 27) = 0.33, F(2, 54) = 1.98, F(2, 54) = 0.43$ いずれも n. s.)。2次の交互作用が有意であった

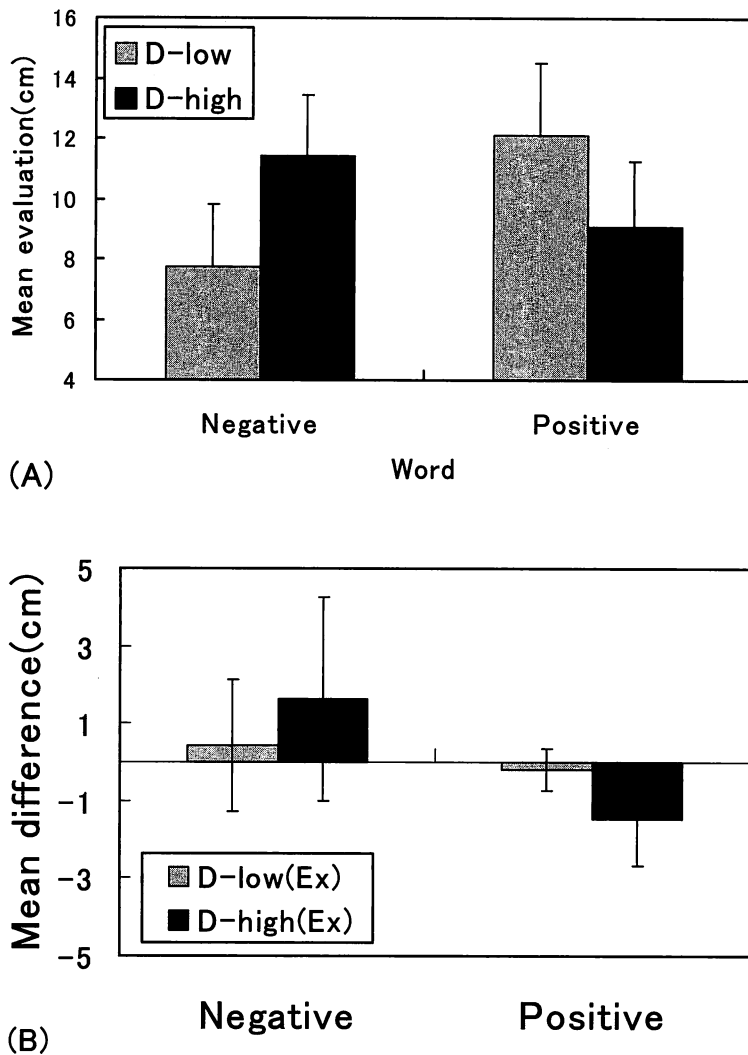


Figure 1. 視覚的類推気分評定 (VAMS) の平均

(A) 実験開始前の高うつ群 (D-high) と低うつ群 (D-low) の否定的情動語 (Negative) と肯定的情動語 (Positive) に対する評定量 (cm)。(B) 気晴らし課題前後の高うつ・実験群 (D-high(Ex)) と低うつ・実験群 (D-low(Ex)) の否定的情動語と肯定的情動語に対する気分評定量の差 (cm)。

ので、下位検定をした結果、統制群における抑うつと単語の種類の単純交互作用、低うつ統制群における単語の種類および高うつ実験群における単語の種類の単純・単純主効果が有意であった (それぞれ $F(2, 54) = 4.25$, $p < .02$, $F(2, 54) = 8.52$, $p < .001$, $F(2, 54) = 7.20$,

$p<.002$)。2 次の交互作用の下位検定の結果をまとめると、低うつ統制群では、情動的否定語についてのエピソード性が他の語に比べて低く、また、高うつ実験群においては、N 語が他の語に比べてエピソード性が高かった (すべて $p<.05$)。低うつ統制群では、N 語や P 語についてのエピソードは詳しく語られるが、情動的否定語についてのエピソードは、エピソード性が低いか、ない場合が多かった。また、高うつ実験群においては、情動的否定語や P 語の情動語に比べ N 語に対するエピソードが詳しく思い出すことが示された (Figure 2)。

過度に一般化された記憶指数を従属変数とした分散分析の結果、単語の種類の主効果と抑うつ傾向×気晴らし課題有無×単語の種類 of 2 次の交互作用が有意であった (それぞれ $F(2, 54)=13.13$, $p<.0001$, $F(2, 54)=4.91$, $p<.01$)。抑うつ傾向の主効果と課題の主効果は有意ではなく (それぞれ $F(1, 27)=0.04$, $F(1, 27)=0.08$, いずれも n. s.)、抑うつ傾向×課題、抑うつ傾向×単語、課題×単語の 1 次の交互作用は有意ではなかった (それぞれ $F(1, 27)=0.72$, $F(2, 54)=1.64$, $F(2, 54)=0.01$ いずれも n. s.)。2 次の交互作用が有意であったので、下位検定をした結果、統制群における抑うつと単語の種類 of 単純交互作用、低うつ統制群における単語の種類および高うつ実験群における単語の種類 of 単純・単純主効果が有意であった (それぞれ $F(2, 54)=3.52$, $p<.04$, $F(2, 54)=8.46$, $p<.001$, $F(2, 54)=9.27$, $p<.0001$)。2 次の交互作用の下位検定の結果をまとめると、低うつ統制群では、

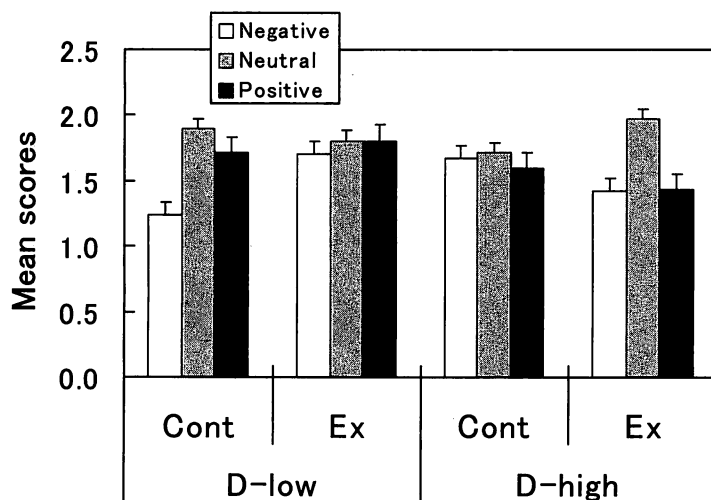


Figure 2. 各群における各語についての再生された自伝的記憶のエピソード性評点の平均
低うつ群 (D-low) の統制群 (Cont) と実験群 (Ex)、高うつ群 (D-high) の統制群と実験群において、否定的情動語 (Negative)、中立語 (Neutral)、肯定的情動語 (Positive) に対して再生されたエピソードについて、エピソード性評価 (0 ~ 3 点) を行った。

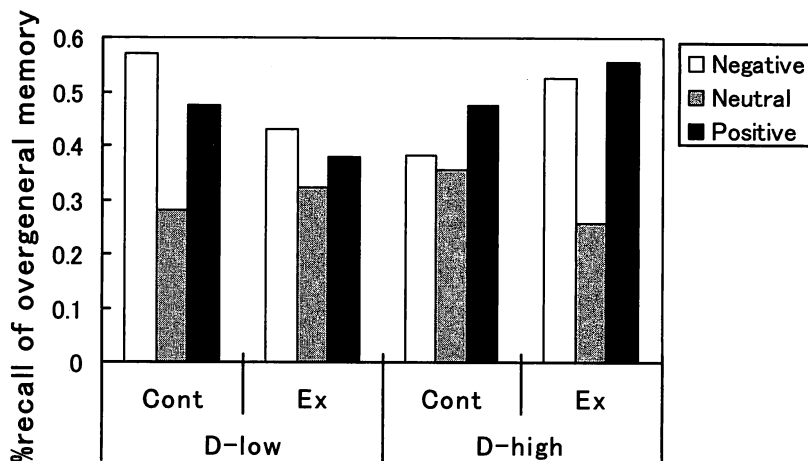


Figure 3. 各群における各語についての過度に概括的な記憶の割合
低うつ群 (D-low) の統制群 (Cont) と実験群 (Ex)、高うつ群 (D-high) の統制群と実験群において、否定的情動語 (Negative)、中立語 (Neutral)、肯定的情動語 (Positive) に対して再生されたエピソードの内容のうち、過度に概括的な記憶の再生率。

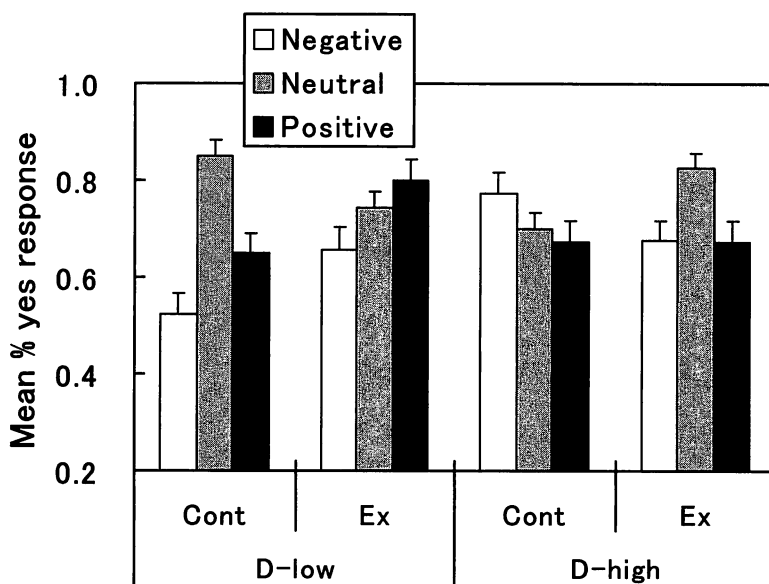


Figure 4. 各群における各語についてエピソードありと答えた比率
低うつ群 (D-low) の統制群 (Cont) と実験群 (Ex)、高うつ群 (D-high) の統制群と実験群において、否定的情動語 (Negative)、中立語 (Neutral)、肯定的情動語 (Positive) に対して、エピソード有り (yes) と答えた比率。

情動的否定語およびP語の過度に一般化された記憶の割合がN語に比べて高く ($p<.05$)、P語と情動的否定語の間には有意な差は認められなかった。また、高うつ実験群においては、情動的否定語およびP語の過度に一般化された記憶の割合がN語に比べて高く ($p<.05$)、P語と情動的否定語の間には有意な差は認められなかった (Figure 3)。

エピソードの有無率 分散分析の結果、単語の種類の主効果、抑うつ傾向×気晴らし課題×単語の種類 の2次の交互作用が有意であった ($F(2, 54)=3.97, p<.05, F(2, 54)=4.46, p<.02$)。2次の交互作用の下位検定を行った結果、統制群における抑うつ傾向×単語の種類と低うつ群における気晴らし課題×単語の種類の単純交互作用が有意であった ($F(2, 54)=5.41, p<.01, F(2, 54)=3.17, p<.05$)。また、統制群・情動的否定語における抑うつ傾向と低うつ・統制群における単語の種類の単純・単純主効果が有意であった ($F(1, 81)=4.71, p<.05, F(2, 54)=7.38, p<.001$)。多重比較から、低うつ統制群においては、情動的否定語に対してありと答える比率が他の語に比べて低く、低うつ群は、高うつ群に比べて情動的否定語に対するエピソードを多く思い出さないことが示された ($p<.05$)。しかし、高うつ群が有意に情動的否定語を多く思い出す傾向は示されなかった (Figure 4)。

情動性評定 分散分析の結果、抑うつ気分と課題の主効果、および抑うつ傾向×課題の交互作用のいずれにおいても有意差は認められなかった (それぞれ $F(1, 27)=0.17, F(1, 27)=0.37$, いずれも $n.s.$)。

考 察

VAMSによる気分評定については、実験開始前の気分評定から、スクリーニングは妥当であったことが示されたが、気晴らし課題前後に評定値に有意な変化は見られず、折り紙課題が抑うつ気分の改善に寄与する可能性が低いことが示された。これは、気晴らし課題の方法上の問題があると考えられ、抑うつ気分を低下させるより有用な方法の検討は今後の課題である。

反応潜時については、「あり」・「なし」の判断に関わらず判断までの反応潜時の場合と「あり」と答えた場合のみの場合のいずれにおいても、有意差は認められなかった。Robinson(1980)の研究では、単語手がかり法を用いて再生されたエピソードについてその感情価の強さを自己評価させると、快不快にかかわらず感情価が高いほどアクセスのしやすいことが示され、エピソードへのアクセスのしやすさについて反応潜時よりは良い指標となることが示されている。本実験でも、Robinson(1980)の研究と同様にエピソード

想起までの反応潜時には有意な差が見られなかったことから、エピソードの内容についての感情価の自己評定を測度として、エピソードへのアクセスのしやすさを検討した方が妥当であったと考えられる。

エピソード性の分析から、低うつ・統制群では、P語やN語に比べて情動的否定語についてのエピソードをあまり詳しく思い出さない傾向があると考えられる。一方、高うつ・実験群では、情動的肯定語や情動的否定語に比べて中立語についてのエピソード性が高いことから、中立語については低うつ・統制群と類似した傾向が見られた。これは、過度に一般化された記憶の頻度についての分析結果でも同様であり、低うつ統制群では、中立語に比べて情動的否定語や情動的肯定語の頻度が高かった。また、高うつ・実験群は低うつ・統制群と全く同様の結果となった。しかし、高うつ・実験群では、気晴らし課題を行ったことにより低うつ・統制群と同様の傾向が見られたかどうかは、高うつ・統制群との差が見られず、分析の結果、気晴らし課題による気分変化がないことから、今回の実験からは不明であり、今後の検討が必要である。

また、高うつ統制群は、低うつ統制群と低うつ実験群の両群と比べてもエピソード性に差がなかった理由には、以下のようなことが考えられる。過度に一般化された記憶を示す研究報告はほとんどがうつ病患者の場合である (Williams, 2000、Nandrino et al., 2000、Williams & Scott, 1988、Brittlebank et al., 1993、Williams & Dritschel, 1992)。本研究の被験者は、SDSによりスクリーニングされた抑うつ傾向の高い被験者である。SDSは、自己報告式の質問紙であり、主観的な抑うつ気分の報告である。主観的に抑うつ気分を報告する被験者と臨床的な診断を受けた抑うつ患者とは必ずしも一致しない可能性もあることから、本研究のような結果が得られたのかもしれない。過度に一般化された記憶がなぜ生じるか説明では、特性的抑うつによるバイアスと状态的抑うつによるバイアスとは区別され、注意と記憶の情報モデルの異なる段階に位置づけられている (Williams, 1999、Raes, Hermans, Eelen & Williams, 2003)。臨床群の被験者においても、特性不安の高い人は過度に一般化された記憶を示さないという報告 (Burke & Mathews, 1992、Williams, 1999)、境界性人格障害でも抑うつ的な特徴を持つにもかかわらず過度に一般化された記憶を示さない (Arntz et al., 2002) という報告がされている。また、非臨床群においてある特性、例えば抑うつ傾向をもつ群 (dysphoric subjects) をスクリーニングする場合には複数の検査や尺度によるスクリーニングの方がよいとされている (Bradley, Mogg, Millar, Bonham-Carter, Fergusson, Jenkins, & Parr, 1997; Kendall, Hollon, Beck, Hammen & Ingram, 1987)。以上のことより、本研究の被験者が、抑うつ傾向は持つが、特性的な

のか状態的なのかは区別できない、あるいは不安傾向の高い被験者も混じっていた可能性もあることから、エピソード性に違いがなかったのではと考えられる。しかし、Van Vreeswijk & De Wilde (2004) の行った14の研究のメタ分析によると、過度に一般化された記憶は抑うつ患者でもっとも顕著に表れるが、自己報告式による抑うつ気分との関係があるかもしれない可能性が示されている。抑うつ患者と抑うつ傾向の高い被験者の思考・認知の特徴は抑うつ患者と共通である部分も多いと考えられるので、臨床群との比較が今後必要である。

エピソードの有無率については、気分一致効果から予測すると、気分一致した感情価値を持つ情報の想起が促進される、つまり自伝的記憶の想起では、抑うつ傾向の低い人では否定的情動語に対して想起しにくい、抑うつ傾向の高い人では否定的情動語に対して自伝的記憶を想起しやすいと考えられる。本研究の結果では、低うつ統制群においては、否定的情動語に対して「あり」と答える比率が他の語に比べて低く、抑うつ気分が低い人は高い人に比べて否定的情動語に対するエピソードを多く思い出さないことが示された。しかし、高うつ統制群が有意に否定的情動語を多く思い出す傾向は示されなかった。したがって、本研究では低うつ群においては気分一致効果が見られたが、高うつ群におけるネガティブ・バイアスは見られなかったといえる。

情動性評定については、抑うつ気分の高低によって、中立語に対するエピソードの内容が、ある特定の情動に偏ることはないことが示されたと考えられる。認知のネガティブ・バイアスは、自己に関連したネガティブな情報において生じやすい。川瀬（1992）の実験では、手がかり語として「自分」という単語を使った場合にのみネガティブ・バイアスが認められ、その他の中立語（「仕事」や「努力」など）にはネガティブ・バイアスは認められていない。本実験では、中立語として用いたのは、活動語（「走る」）や物の名（「本」）であった。したがって、本研究の手がかり語は、自己関係的な情報処理を促進させるものではなかったため、ネガティブ・バイアスが認められなかった可能性がある。

また、自伝的記憶の情動価の分析としては、むしろ再生エピソードの自己評定を行うことが必要だったと考えられる。Raes et al. (2003) は、Williams (1999) および Williams, Ellis, Tyers, Healy, Rose & MacLeod (1996) の提唱した記憶方略としての情動—調整仮説 (affect-regulation theory)、すなわち「過度に一般化された記憶を示す被験者は、子供の頃の否定的な情動体験の記憶をできるだけ特定せずに思い出す方略をとる、つまり否定的情動と記憶の結びつきをできるだけ最小にするように学習するという仮説」を、実験的に検証する際に、ストレス課題を行行情動の強さを被験者自身に評定させた。その結果、特

定の記憶をよく再生する被験者の方が、そうでない被験者よりも課題に対する不快な評定が高かった。このことから、本研究においても、各単語についてのエピソードについて、被験者自身による情動評定を行うと、より詳細な検討が行えたと考えられる。

以上の結果をまとめて、仮説を検証すると、仮説としては、第1に、もし、過度に一般化された記憶が非臨床群における状態的抑うつ気分との関係があるならば、抑うつ傾向の高い被験者が再生した自伝的記憶のエピソード性は、抑うつ傾向の低い被験者の自伝的記憶よりも低いと予測された。本研究の結果、低うつ統制群では、肯定的情動語や中立語に関してはエピソード性が高いが、否定的情動語についてのエピソード性が低い傾向があり、高うつ実験群は低うつ統制群と全く同様の結果となった。しかし、高うつ統制群でエピソード性が低いという結果は得られなかったことから、臨床群との比較が必要ではあるが、非臨床群の高うつ傾向の被験者では過度に一般化された記憶を示さなかったと考えられる。これは、Williams(1999)の過度に一般化された記憶を示すのは、認知スタイルの特徴であり特性的なものであり、気分状態に依存しないという仮説を支持するものである。抑うつ傾向の高い被験者が気晴らし法を行った後の再生では、エピソード性の低い傾向が緩和されると予測された。しかし、本研究の結果、気晴らし課題による気分変化の効果が明確ではなくこのような傾向は見られなかった。

第2に、抑うつ気分によるネガティブ・バイアスがあるならば、抑うつ傾向の高い被験者に否定的情動語を提示した場合と肯定的情動語を提示した場合のエピソード有無率を比較すると、否定的情動語の方がエピソードが「ある」と答えると予測された。本研究の結果から、低うつ群においては気分一致効果が見られたが、高うつ群におけるネガティブ・バイアスは見られなかったといえる。また、抑うつ傾向の高い被験者が気晴らし法を行った後の再生では、そのような偏り傾向が緩和すると予測されたが、本研究の結果、先述したように気晴らし課題による気分変化の効果が明確ではないので、低うつ統制群では否定的情動語についての有無率が低く、高うつ統制群が否定的情動語に対して「あり」と多く答えるという結果は見いだされなかった。

第3に、抑うつ傾向の高い被験者が再生した自伝的エピソードの情動性（内容における否定的な気分の強さあるいは弱さ）は、抑うつ傾向の低い被験者よりも否定的な気分が強く表れることはなかった。これは、手がかりにした単語が自己関係的な情報処理を促進させるものではなかったので、ネガティブ・バイアスが認められなかった可能性があるとともに、再生されたエピソードに対する自己評定による情動性を測度にしなかったことによると考えられる。

謝 辞

本研究の実施および本論文の作成にあたって、関西大学社会学部産業心理学専攻久本博行助教授に、臨床心理士としての立場から認知行動療法およびうつ病についての貴重な御教唆をいただいたことに感謝いたします。

引用文献

- Arntz, A., Meeren, M. & Wessel, I. 2002 No evidence for overgeneral memories in borderline personality disorder. *Behaviour Research and Therapy*, 40, 1063-1068.
- Bradley, B. P., Mogg, K., Millar, N., Bonham-Carter, C., Fergusson, E., Jenkins, J. & Parr, M. 1997 Attentional biases for emotional faces. *Cognition and Emotion*, 11, 25-42.
- Brittlebank, A. D., Scott, J., Williams, J. M.G. & Ferrier, I. N. 1993 Autobiographical memory in depression : state or trait maker? *British Journal of Psychiatry*, 162, 118-121.
- Bower, G. H. 1981 Mood and memory. *American Psychologist*, 36, 129-148.
- Burke, M. & Mathews, A. 1992 Autobiographical memory and clinical anxiety. *Cognition and Emotion*, 6, 23-25.
- Christianson, S.-Å. & Safer, M. A. 1999 Emotional events and emotions in autobiographical memory. In Rubin, D. C.(Ed.) *Remembering our past : studies in autobiographical memory*(pp218-243), Cambridge university press, UK.
- Conway, M. A. 2001 Sensory-perceptual episodic memory and its context: autobiographical memory. *Philosophical Transactions of the Royal Society London : Biological Sciences*, 356, 1375-1384.
- Crovitz, H. F. & Sciffman, H. 1974 Frequency of episodic memories as a function of their age. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 4, 517-518.
- 福田一彦 & 小林茂雄 1983 日本版SDS使用手引, 三京房, 京都.
- Fennel, M. 1989 Depression Hawton, K., Salkovskis, P. M., Kirk, J. & Clark, D. M(Eds.) *Cognitive Behavior Therapy for Psychiatric Problems : a practical guide* (pp169-234). Oxford University Press.
- 伊藤美加 2000 気分一致効果を巡る諸問題—気分状態と感情特性 心理学評論 43 368-386.
- 川瀬隆千 1992 日常記憶の検索に及ぼす感情の効果—検索手がかりの自己関係性について— 心理学研究 63, 2, 85-91.
- Kendall, P. C., Hollon, S. D., Beck, A. T., Hammen, C. L. & Ingram, R. E. 1987 Issues and recommendations regarding the use of the Beck Depression Inventory. *Cognitive Therapy and Research*, 11, 289-299.
- McNally, R. J., Lasko, N. B., Macklin, M. L., & Pitman, R. K. 1995 Autobiographical memory disturbance in combat-related Posttraumatic- Stress Disorders. *Behaviour Research and Therapy*, 33, 629-630.
- Nandrino, J.-L., Pezard, L., Posté, A., Réveillère, C. & Beaune, D. 2002 Autobiographical memory in major depression : A comparison between first-episode and recurrent patients. *Psychopathology*, 35, 335-340.
- Nolen-Hoeksema, S. 1991 Response to depression and their effects on the duration of depressive episodes. *Journal of Abnormal Psychology*, 100, 569-582.
- Nolen-Hoeksema, S. & Morrow, J. 1993 Effects of rumination and distraction on naturally occurring depressed mood. *Cognition and Emotion*, 7, 561-570.
- Pyszczynski, T., & Greenberg, J. 1987 Self-regulatory preservation and the depressive self-focusing style:A

- self-awareness theory of reactive depression. *Psychological Bulletin*, 102, 122-138.
- Raes, F., Hermans, D., Eelen, P. & Williams, J. M. G. 2003 Autobiographical memory specificity and affect regulation: an experimental approach. *Emotion*, 3, 201-206.
- Robinson, J. A. 1976 Sampling autobiographical memory. *Cognitive Psychology*, 8, 578-595.
- Robinson, J. A. 1980 Affect and retrieval of personal memories. *Motivation and Emotion*, 4, 149-174.
- 坂本真士 1997 自己注目の持続の段階 坂本真士著 自己注目と抑うつ of 社会心理学 (pp143-152) 東京大学出版会, 東京.
- 関口理久子 2002 「私の記憶」と「私についての記憶」—自伝的記憶検査作成の試み 1— 関西大学社会学部紀要 33, 2, 307-324.
- 田上恭子 2002 抑うつにおける自己関連的な認知のネガティブ・バイアス—気分一致効果に注目して— 心理学研究, 73, 412-418.
- Williams, J. M. G. 1999 Depression and the specificity of autobiographical memory. In Rubin, D. C.(Ed.) *Remembering our past: studies in autobiographical memory* (pp244-267), Cambridge university press, UK.
- Williams, J. M. G. & Dritschel, B. H. 1992 Emotional disturbance and the specificity of autobiographical memory. In Conway, M. A., Rubin, D. C., Spinnler, H. & Wagenaar, W. A. (Eds.) *Theoretical perspectives on autobiographical memory*.(pp391-412), Kluwer Academic: Dordrecht, The Netherlands.
- Williams, J. M. G. & Scott, J. 1988 Autobiographical memory in depression. *Psychological Medicine*, 18, 689-695.
- Williams, J. M. G., Ellis, N. C., Tyers, C., Healy, H., Rose, G. & MacLeod, A. K. 1996 The specificity of autobiographical memory and imageability of future. *Memory and Cognition*, 24, 116-125.
- Watkins, E., Teasdale, J. D. & Williams, R. M. 2000 Decentring and distraction reduce overgeneral autographical memory in depression. *Psychological Medicine*, 30, 911-920.
- Watkins, E., Vache, K., Verney, S. P., Mathews, A., & Muller, S 1996 Unconscious mood-congruent memory bias in depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 105, 34-41.
- Wessel, I., Meeren, M., Peeters, F., Arntz, A., & Merckelbach, H. 2001 Correlates of autobiographical memory specificity: the role of depression, anxiety and childhood trauma. *Behaviour Research and Therapy*, 39, 409-421.
- Van Vreeswijk, M. F. & De Wilde, E. J. (2004) Autobiographical memory specificity, psychopathology, depressed mood and the use of the autobiographical memory test : meta-analysis. *Behaviour Research and Therapy*, 42, 731-743.
- Zung, W. W. K. 1965 A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, 12, 63-70.

—2005. 1. 17受稿—